

## 騎乗姿勢の観察から見た馬事文化の考察

柴田 眞美\*

The Horsemanship from the Viewpoint of the Riding Posture

Mami Shibata

### Abstract

In our country, horse racing is a popular recreation today, and also there is the trend which young people and women are enjoying it as a fashion. Young people who grew in affluent environment in a period of a high economic growth are instinctively attracted to the drama produced by a man and a horse, which may be an aspect of this trend. This trend being considered from a view of a horsemanship in international society, owing to the disorders and revolutions of the social situation after the war, a very irregular situation that horseback riding tends to be imagined as horse racing would have been fixed. Under such a condition in our country, horseback riding in the equestrian team of the university is practiced in order to attain the dream of establishing the partnership between a man and a horse. In this study, as a sample of the average present state of horseback riding in our country, the riding practice of an equestrian team of the university was observed, and from the analysis of the postures and actions of a man and a horse, the horsemanship as a culture in our country was considered. In conclusion, in order to realize the mission of the modern horsemanship as the partner of people and as the cultivation of aesthetic sensitivity to young people, it is necessary not to purchase the horsemanship completed in the advanced nations but to create and promote our own horsemanship. Further, it is indispensable, an idea of regarding a horse as an irreplaceable partner of life. It is considered that, when such time comes, we can have a profound insight into the function and beauty of equestrian habit.

(キーワード 乗馬 : horseback riding 姿勢 : posture 馬事文化 : horsemanship 乗馬服 : equestrian costume)

### I. 序

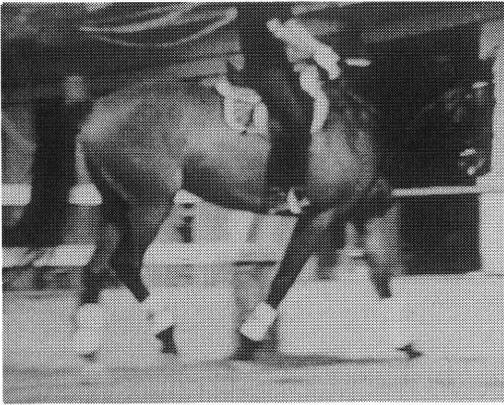
現在の我が国では、「馬」と言えばイコール競馬、がイメージされる。最近はずいぶん競馬が流行している。競馬の雰囲気明るくなってきたとは言え、まだギャンブルのイメージが強い。一方、乗馬といえば、一部のお金持ちの

道楽、という風潮が強い。最近はかなり乗馬が普及してきたが、それでも一般的ではない。子供たちが、馬に乗りたい、と言っても、その願いが叶えられることは少ない。

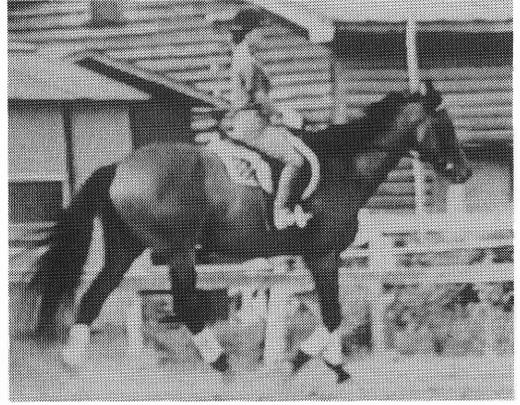
情操教育の目的で、小・中学校では飼育動物を世話し、触れ合うことが推奨されている。しかし、一般的に飼育されている動物の種類、飼育方法から考えると、「生き物との心の通った触れ合い」が実現されているとは言いがたい。

馬事先進国では、青少年育成の目的で、ポニー

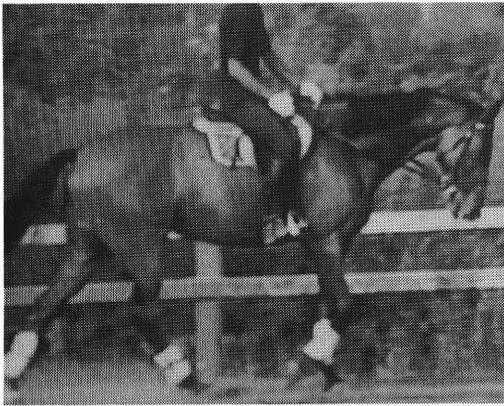
\* 文化女子大学



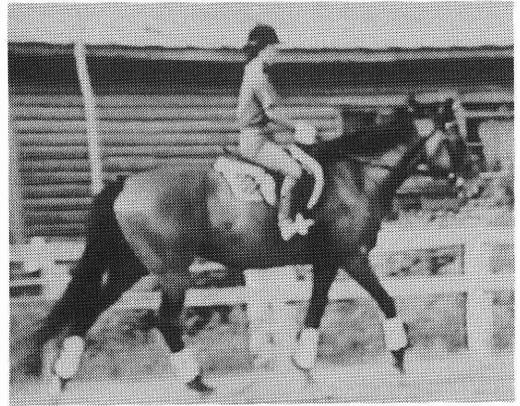
1



2



3



4

Fig.1 Subject A on Asayuri (left) and Subject B on Asayuri (right) 1~4 ; the extended walk

図1 アサユリ号に騎乗した被験者 A (左) と被験者 B (右) 1~4 ; 伸長常歩時

スクールなどの施設が充実し、心身の育成に貢献している<sup>1)</sup>。またリハビリテーションの一環として、積極的に乗馬が活用されている<sup>2)</sup>。我が国では、馬術部のある大学では、学生は部員となることによって、馬に接する機会に恵まれる。しかし、卒業すると一般の乗馬クラブの会員となって馬に接する他なく、仕事との両立などから馬との触れ合いが途絶えてしまうケースも多い。

このような現状の根本原因の一つは、馬不足である。競走馬用のサラブレッドは沢山生産されているのに、馬が足りない。そこで、我国の普及的な乗馬実態を反映していると考えられる

大学馬術部における、主として練習馬での騎乗姿勢を解析し、その結果を契機として、我国の馬事文化の現況について考察した。

## II. 方法

被験者、供試馬、および実験フィールドは、麻布大学馬術部の協力を得た。

被験者および、供試馬は以下に示す6人、5馬匹である。

A : 上級者 (全日本クラス)、男性 & アサユリ号 (練習馬)

B : 中級者 , 女性 &

- アサユリ号 (練習馬)  
 C: 上級者(馬術部主将), 男性 &  
 アサユキ号 (競技馬)  
 D: 初級者, 女性 &  
 アサリュウ号 (練習馬)  
 E: 初級者, 女性 &  
 ウィークエンド号 (練習馬)  
 F: 初級者, 男性 &  
 チターン号 (練習馬)

騎乗時の服装は、姿勢が観察しやすいように、半袖のポロシャツとフィットタイプのキュロットとした。長靴、手袋、帽子、鞍、馬銜(ハミ)、鞭などは、普段各人馬に合わせて使用しているものとした。

馬場に、半径約 25m の半円を描き、円の中心点に VTR カメラを三脚で設置し、人馬の進行に合わせてカメラを水平に回旋させながら撮影した。使用 VTR カメラは victor GR-7 であり、カメラ高は、地面から各馬匹の前膝までの高さとした。右手前における、常歩、速歩、駈歩(各短縮/伸長の 2 種の歩度で、伸長速歩は軽速歩とした)、および障碍飛越可能な人馬には 1m の障碍飛越を行なわせ、右側面より撮影した。

分析方法は、VTR テープをモニター上に再生し、普通速およびスロー再生によって、各人馬の動作の特徴を観察し、さらに、その特徴を

よく示す画面を抽出して、静止画像とし、その画面をスチールカメラで撮影し、写真とした(写真 1~49)。

初めに、同一馬匹(アサユリ号)騎乗における、上級者(被験者 A)と中級者(被験者 B)について、動作の印象、および同一歩法の同様の位相における人馬の体勢の状況を比較検討し、次に他の 4 人馬について、動作の印象と各人馬の特徴をよく示す位相を観察した。本論文中では、人馬の動作などについては馬術用語を用いた。

### III. 結果および考察

#### III-1. 同一馬における上級者と中級者との比較

動作時の印象は、まず、同一馬であるにも関わらず、ウマの姿勢が全く異なる。被験者 A が騎乗した場合には、ウマは(このウマが可能な限りの)収縮姿勢(馬体背面を上を弧を描くように伸展)をとり、騎乗者の手の内に入り、活発に運動をし、柔らかさと弾発を感じる。しかし、被験者 B が騎乗した場合にはウマは作業姿勢であり、活発さや弾発に欠ける。騎乗者の姿勢の印象は、被験者 A は、騎座がしっかりしウマを十分に推進することが出来、脚が柔軟である。被験者 B は、騎乗姿勢に硬さは感

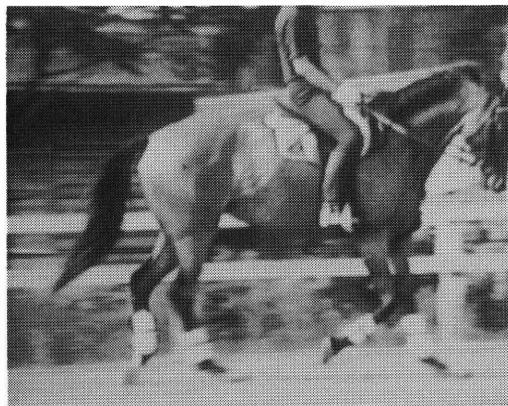
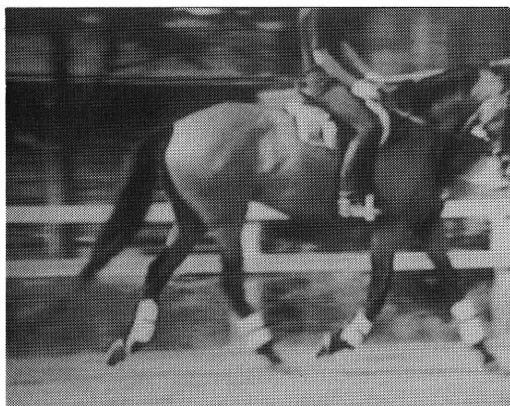


Fig. 2 Subject A on Asayuri in the collected trot  
 図 2 被験者 A のアサユリ号での短縮速歩

じられないが、騎座が甘く、推進不足である。

伸長常歩では (Fig. 1), ウマの背の前後への揺れに随伴して、ウマの後駆が前進する位相 (写真 1, 2) ではヒトの骨盤が前方へ運ばれ、ウマの前駆に重心が移動する位相 (写真 3, 4) では逆にやや後方へ戻されるようになる点は、被験者 A, B に共通である。しかし、被験者 B ではウマの重心が前方へ移動する際、腰の張り (ヒトの腰椎部伸展) が不十分で、上体が前傾し、肘部が前方へ引っ張られてしまう (写真 4)。このウマは、頸や口が固めであるので、上級者の被験者 A では、騎座と脚で強くウマを推進しつつ、左右に衝の抜き差しをして、ウマの衝受けを維持しようとしている (写真 3)。被験者 B では、何もしないのでウマが衝を受けず、棒のように伸ばした頭頸でよけいに騎乗者の腕を前方へ引っ張る結果となる (写真 4)。写真では、静止画像のためははっきりしないが、VTR を見ると、被験者 A の場合は、ウマの歩様に弾発があり活発に歩き、特に後肢の踏み込みが大きいのが、被験者 B の場合は、ウマの動作が不活発である。

Fig. 2 は、被験者 A による正反動の短縮速歩である。(被験者 B では、常歩でウマに衝をキッチリ受けさせる事が不可能であったので、正反動の速歩は出来なかった。) 馬体が上昇する空中期 (写真 5) でもヒトの坐骨は鞍の中央に位置し、着地期 (写真 6) では、後上方から前下方へ向けて坐骨が鞍壺に着陸し、上体は空中期よりやや後傾する。脚は前出してしまうことが無く、踵が下りて自然に鎧が踏めている。

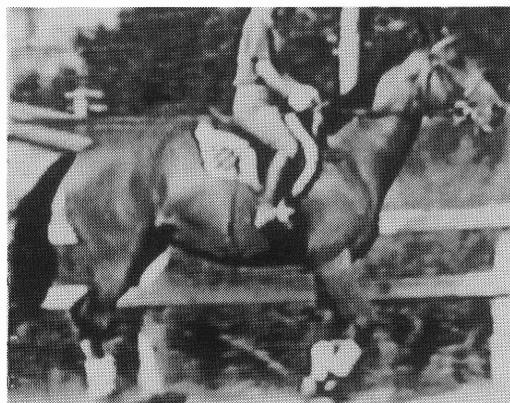
Fig. 3 は、伸長速歩 (軽速歩にて) である。このウマは、頸と口が固めなので、軽速歩では、被験者 A もウマの能力に合わせて、過度な収縮を求めていない。しかし、ウマは衝とのコンタクトを保っている。鞍に座った位相 (写真 7, 8) では、被験者 A, B 共に上体をやや前傾させているが、VTR での動画面を見ると、被験者 A では後上方から前下方に向けて坐骨で座り込んでいるのに対し、被験者では、骨盤部がウマの動きに遅れ気味である。鎧に立った位相

で (写真 9, 10) 両者の相違がはっきりし、被験者 A では全身がほぼ垂直であるのに対し、被験者 B では上体が前傾し、脚がやや前出ししている。骨盤がウマの動きに遅れているので、手綱を持った拳がウマの口を後方へ引っ張ってしまい、ウマが前へ動きにくく、ウマは後方へ引かれる衝を嫌い、顔を上方へ挙げて、衝の苦痛から逃れようとしている。被験者 A では、騎乗者がウマを推進しているので、衝で口が後方へ引かれること無く、口が納まっている。寺田らは<sup>3)</sup>、軽速歩時の上級者と初心者の筋活動を測定し、上級者では大内転筋を作用させ頭頂の前後運動を安定させる調整動作が見られ、初心者ではこの調整動作が見られず腹直筋、脊椎起立筋の能動的・瞬時的活動が現われた、と報告している。経験的に、初心段階では上半身に不必要に力みが見られ、かつ内転筋を含めたいわゆる「騎座」<sup>4)</sup>が弱く馬の背に安定して乗ってはいられない事実と考え合わせると、確かに騎乗者の姿勢の訓練段階の相違が馬の姿勢へと影響を及ぼしている。

Fig. 4 は、伸長駢歩である。VTR で動きを観察すると、まず被験者 A が騎乗した際の方がウマを手の内に入れてかつ歩度 (スピード) が速い。この事は、写真 11~16 の背景の流れの様子にも現れている。騎乗者の姿勢は、被験者 A では、骨盤が鞍に付き、ウマと一体になっている印象であるのに対し、被験者 B では、上体で前後に動きすぎ、鞍付きが不十分である。写真 11, 12 は、ウマが前肢 1 肢で体重を支え、重心が後方から前方へ強く移動する位相である。その動きによって、ヒトの骨盤は自然に前方へ運ばれる。しかし、被験者 B では、手綱に寄りかかり騎座が浅い。ヒトの骨盤がウマの背の動きに遅れている分、手で手綱につかまり、安定を得ている。そして、空中期では、被験者 A では鞍の前方へ向けて安定してバランスを保っているが (写真 13)、被験者 B では鎧と手綱によって安定を助けている。従って、ウマの口は衝で後方へ引かれている (写真 14)。後肢が着地している位相では、被験者 A でも鞍の後橋



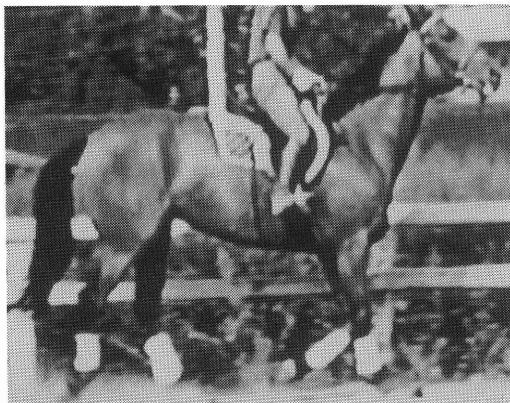
7



8



9



10

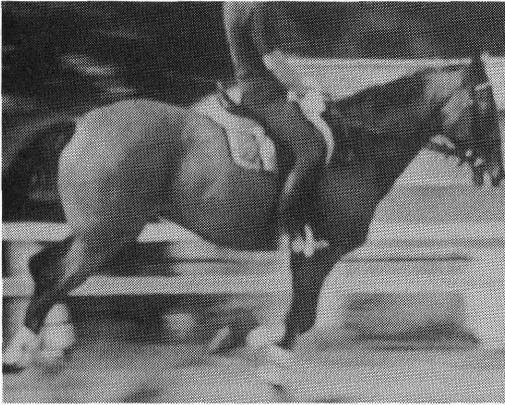
Fig. 3 Subject A on Asayuri (left) and Subject B on Asayuri (right)  
7~10; the rising trot

図3 アサユリ号に騎乗した被験者 A (左) と被験者 B (右)

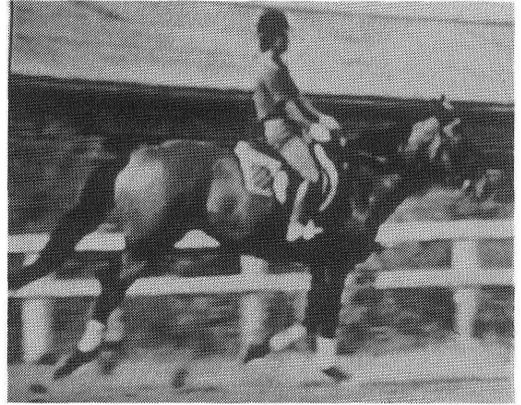
寄りに骨盤が位置するが、踵が非常に下げられ騎座は深く、安定しているからこそ、拳で銜の左右への操作を行うことが出来る(写真15)。被験者Bでは、上体が内方へやや傾き(まっすぐな安定に欠ける)、このあとウマの頭部が前方へ進出すべき位相であるにもかかわらず、ウマの口角に銜が必要以上に当り、動きが阻害されている(写真16)。

Fig. 5, Fig. 6 は、障碍飛越である。踏切寸前では、被験者Aでは安定した2ポイント姿勢であり、ウマに飛越前のタメを与えているのに対し(写真17)。被験者Bではウマの動きにやや遅れているいるため上体が立ちすぎ手綱で

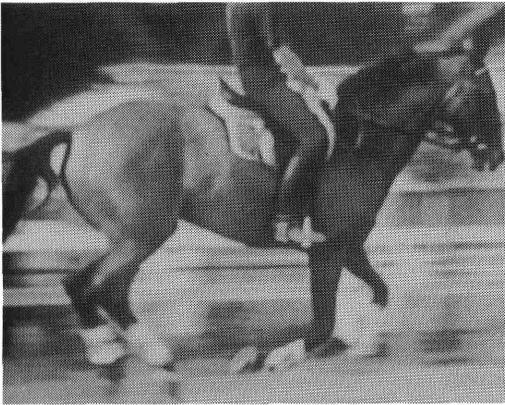
ウマの口を引っ張ってしまっている(写真18)。障碍の真上でも、被験者Aはウマの動きと一致し、ヒトの肘は屈曲され余裕がある(写真19)のに対し、被験者Bでは上体が立ちすぎ肘に余裕が無い(写真20)。着地および着地後の駈歩への移行を見ると、被験者Aではウマの重心に一致して着地し、障碍上で肘に余裕があった分、肘関節を進展させてウマの口に邪魔をせず(写真21)、ウマの後躯が前肢の方へ入ってきても弾かれること無く鞍に座ることが出来る(写真23)、2ポイントの駈歩にスムーズに移行出来る(写真25)。(このウマは頭頸の柔軟さに欠けるので、障碍飛越後、急速に収縮を求め



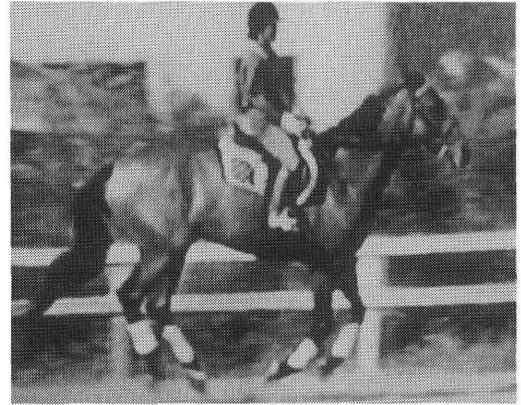
11



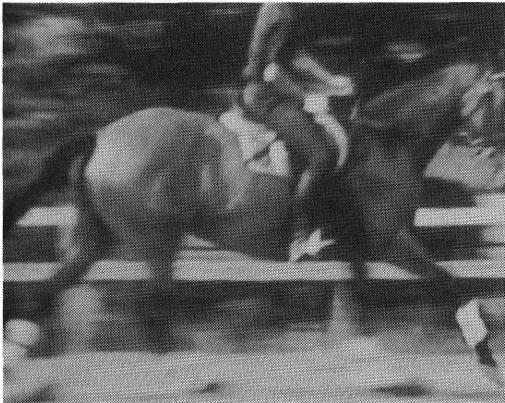
12



13



14



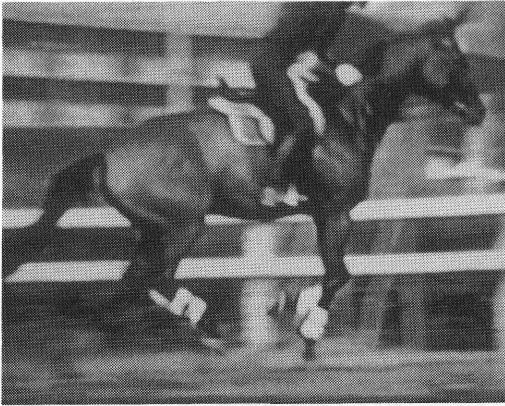
15



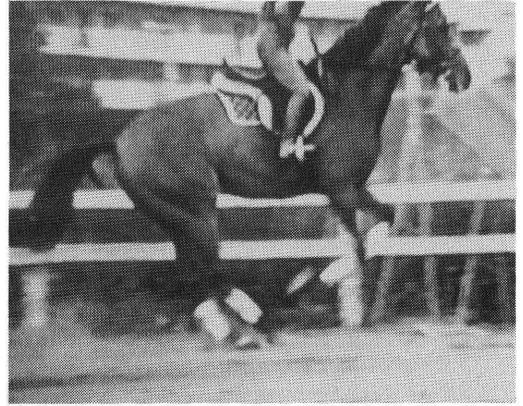
16

Fig. 4 Subject A on Asayuri (left) and Subject B on Asayuri (right)  
11~16 ; the extended canter

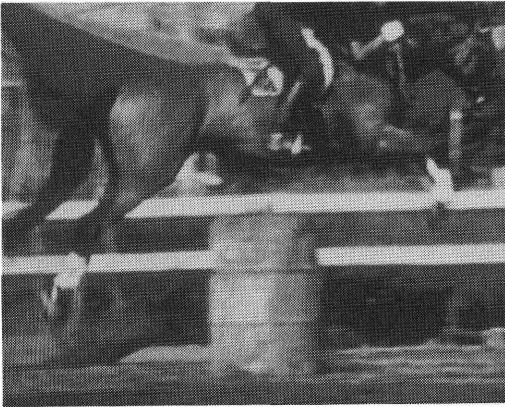
図4 アサユリ号に騎乗した被験者 A (左) と被験者 B (右)  
11~16 ; 伸長駢歩時



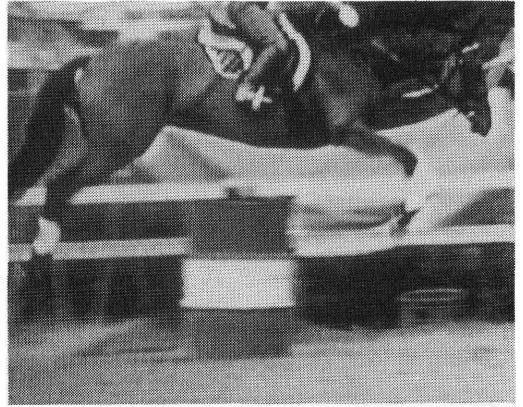
17



18



19



20

Fig. 5 Subject A on Asayuri (left) and Subject B on asayuri (right)  
17, 18 ; just before the take off 19, 20 ; to jump

図5 アサユリ号に騎乗した被験者 A (左) と被験者 B (右)  
17, 18 ; 踏切り寸前 19, 20 ; 飛越

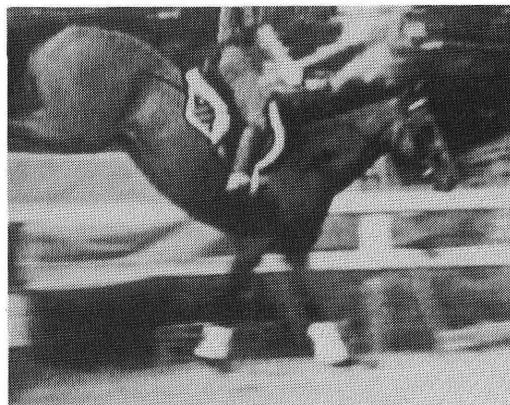
ず、むしろ手綱を短く持ったまま緩めてウマに余裕を与えている。被験者 B では、着地時に上体を起こして鞍に座れたかのようなが、ウマの動きに遅れているため手綱でウマの口に衝を当て (写真 22)、ウマの後躯が前肢の方へ入って来ると鞍に弾かれ (写真 24)、飛越後の駈歩では手綱を引っ張ってウマの口とケンカになってコントロールが不十分である (写真 26)。障碍飛越時の姿勢について、熟練度の相違によって、馬上での騎乗者の重心速度および馬の重心速度の安定性に差が見られることが、寺田らによって観察されている<sup>9)</sup>。

### Ⅲ-2 他の 4 人馬の観察

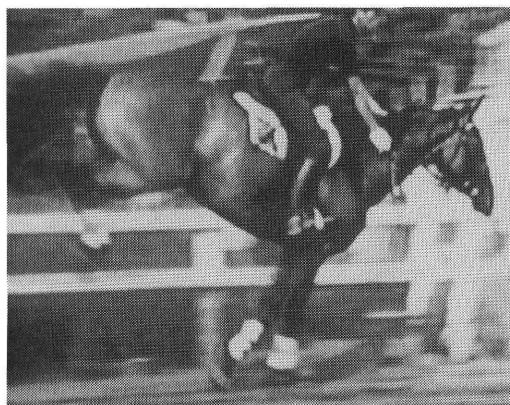
Fig. 7 は、被験者 C (上級者) と競技馬であるアサユキ号の短縮常歩である。動きの印象は、人馬の信頼関係と、品格が感じられる印象であった。この撮影を行った時期は、競技馬のオフシーズンであり、本格的なトレーニングは開始されていないにも関わらず、このような収縮姿勢をとれる。写真 27 は前躯に重心が移るところで頸がやや低い。写真 28 は後躯が踏み込むところで頸がやや高くなる。Fig. 1 の写真 1, 3 はアサユリ号の伸長常歩であるが、比較するとアサユキ号の馬体の柔軟さが伺われる。



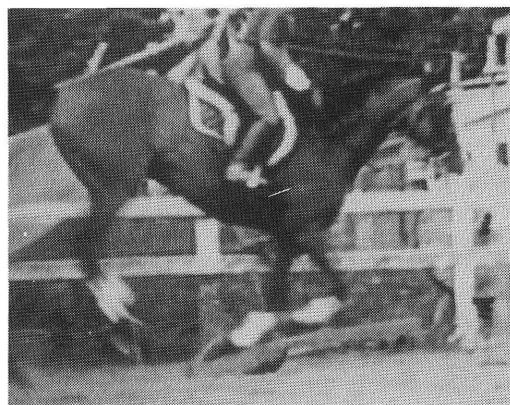
21



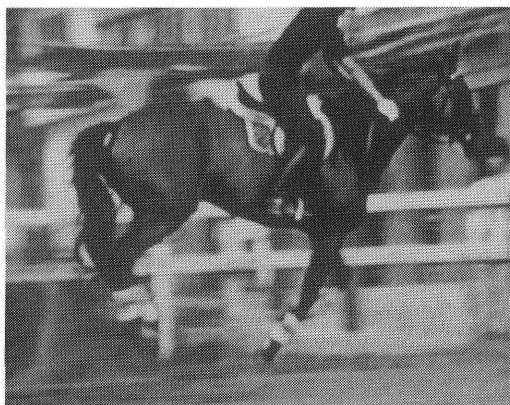
22



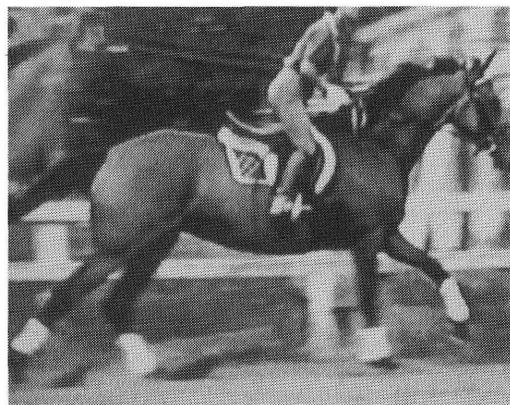
23



24



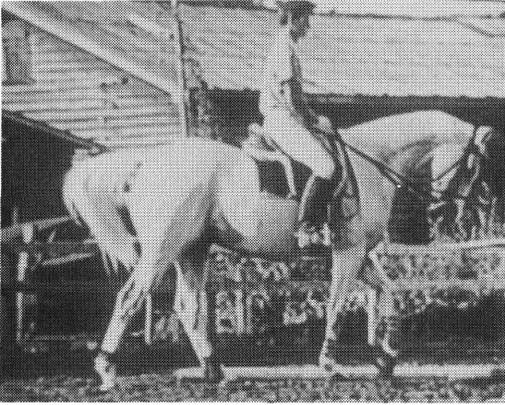
25



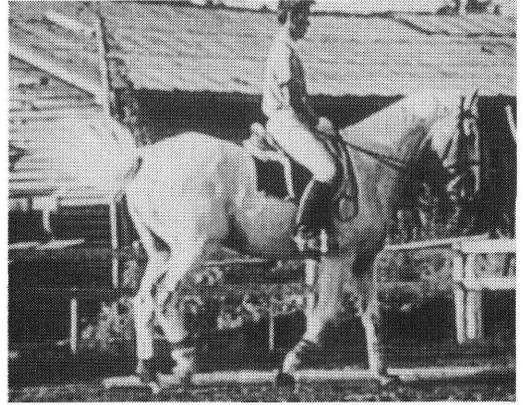
26

Fig. 6 Subject A on Asayuri (left) and Subject B on Asayuri (right) 21~24 ; to land 25, 26 ; the canter after the landing

図6 アサユリ号に騎乗した被験者 A (左) と被験者 B (右) 21~24 ; 着地 25, 26 ; 着地後の駈歩



27



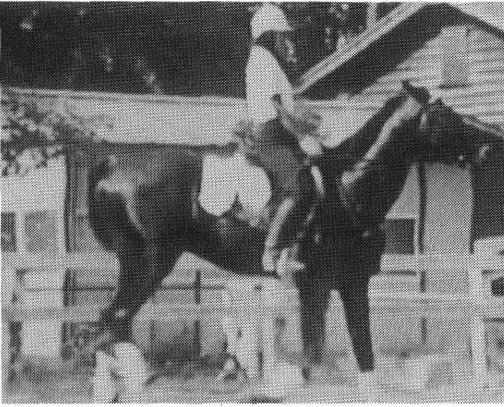
28

Fig.7 Subject C on Asayuki in the collected walk  
 図7 被験者Cのアサユキ号での短縮常歩

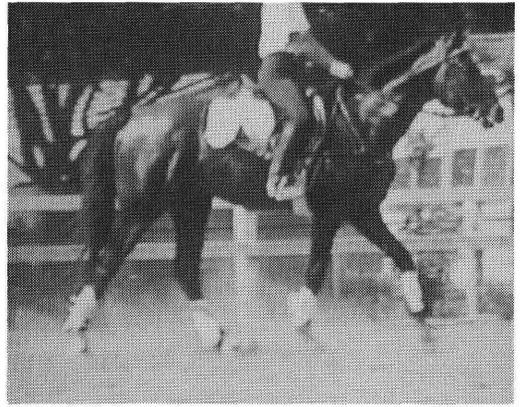
Fig. 8, 9 は、被験者 D (初級者) とアサリュウ号である。動きの印象は、騎乗者は身体が固く (肩に力が入り股関節の柔軟さに欠ける) 鎧が深く、ウマは銜を嫌っている。常歩では、後躯が入ってくる位相では力みつつも初心者なりにまっすぐ座っていられるものの (写真 29)、重心が前駆に移動する位相 (写真 30) では、ウマに引っ張られて上体が前傾してかつ、上腕が前出してしまい、手綱 (銜) とウマの口とのコンタクトが失われる。短縮速歩 (正反動) では、空中期 (写真 31) でウマから浮かされ踵も挙がり、着地期に鞍からの衝撃を受けてヒトの顎が挙がってしまう (写真 32)。伸長歩では、重心が後方から前方へ強く移動する位相では (写真 33)、反り身になってウマについてゆくが、脚は前方へ振り出されてしまい、空中から着地した時には (写真 34) ウマの動きに遅れているため後躯の踏み込みによる衝撃で鞍から浮かされてしまい、安定するために手綱を引っ張り、ウマは引かれる銜を嫌って顎をやや左に振って、銜の苦痛を解除しようとしている。障碍飛越では、踏切りで力んで先随伴で、足尖が外側を向き (写真 35)、障碍の真上でも力んだ膝と足根で馬体にしがみつき足尖はさらに外側を向いている (写真 36)。着地後、後躯に大きく弾まされた騎乗者はバランスを失って前のめ

りになり (写真 37)、ウマは意味不明の背への衝撃や引かれる銜をきらって大きく頸を横に振り、突っ走ってしまい (写真 38)、騎乗者はウマをコントロールするどころか落馬しない様にしがみついているのが精一杯となる (騎座が甘いために骨盤がウマより遅れ、腕はウマに引っ張られ、脚は前方へ振り出され、腰で踏ん張れないのでウマをバランスバックする事が出来ない)。

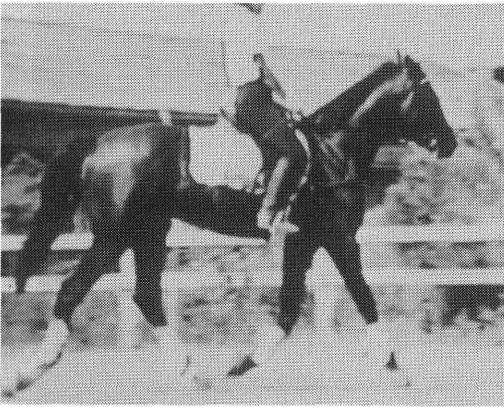
Fig. 10 は、被験者 E (初級者) とウィークエンド号である。動きの印象は、ウマは、銜を求めようとしているのにも関わらず、騎乗者の推進不足と騎座脚と拳のアンバランスから、無意味に引かれる銜を何とか振り払おうとウマは頭を様々に振っている。騎乗者は股関節、膝関節が固く、鎧を踏めず踵が挙上してしまっている。写真 39 は短縮常歩でしかも自然に後躯からヒトの骨盤が前方へ送られる位相であるが、それでも坐骨は鞍の後橋に位置し、脚は前方であり「腰掛乗り」の姿勢である。短縮速歩 (正反動) になるとますますウマの動きに遅れ、手綱にしがみついたため、銜を引っ張ってしまいウマはそれを嫌って口を割っている (写真 40)。伸長速歩 (軽速歩) では、腰を上げると拳も一緒に挙上してしまい (写真 41)、ウマより遅れて鞍に座るため股関節、膝関節を屈曲させて馬



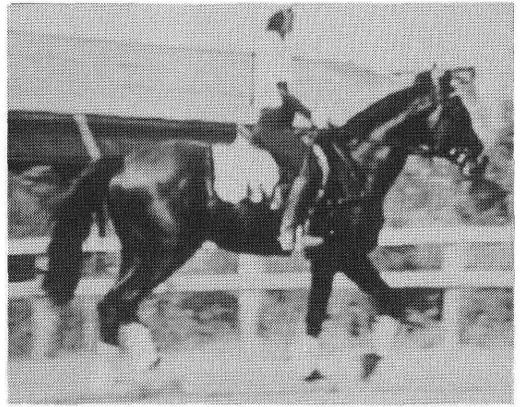
29



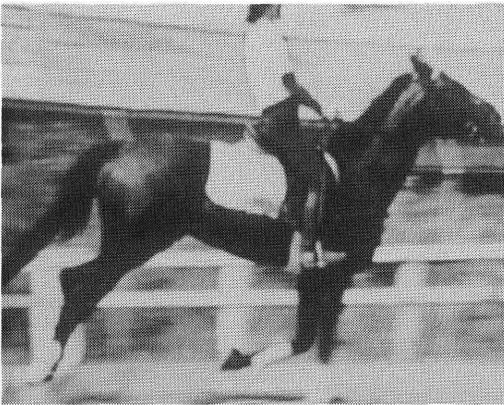
30



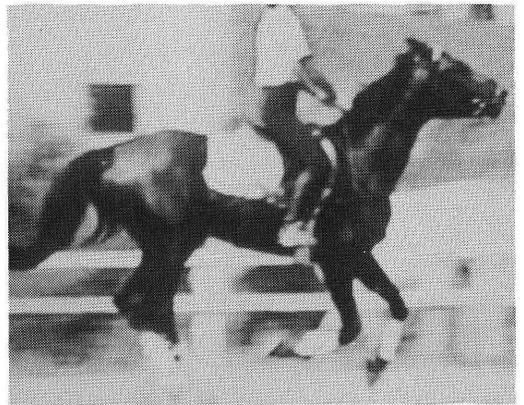
31



32

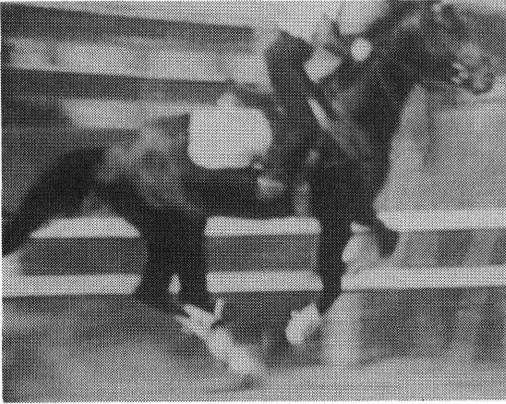


33

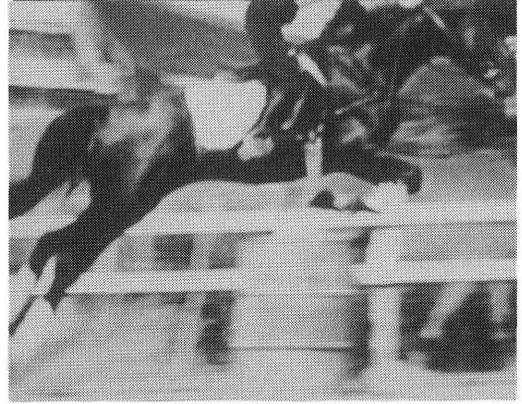


34

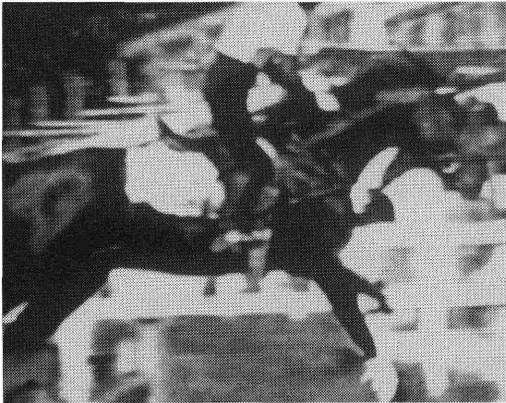
Fig. 8 Subject C on Asaryhu (29~30 ; walk, 31~32 ; trot, 33~34 ; extended canter)  
図8 アサリュウ号に騎乗した被験者C (29~30 ; 常歩, 31~32 ; 速歩, 33~34 ; 伸長駢歩)



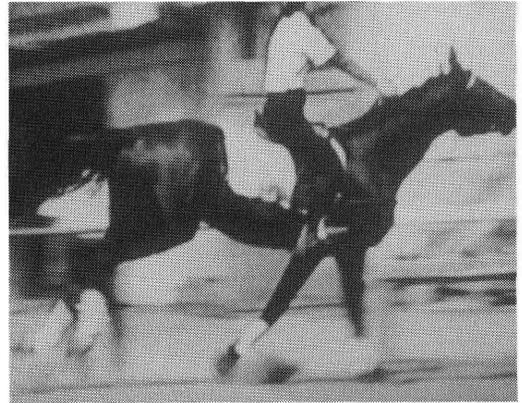
35



36



37



38

Fig. 9 Subject C on Asaryhu (35 ; just before the take off, 36 ; jump, 37~38 ; the canter after the landing)

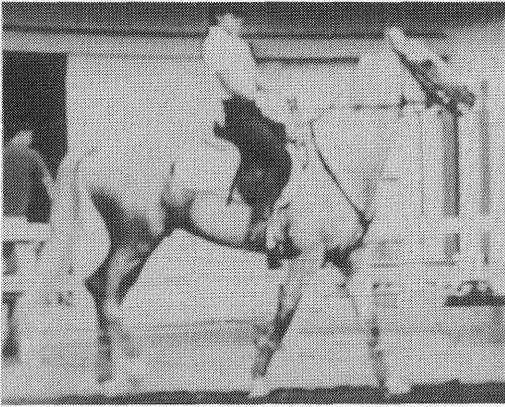
図9 アサリュウ号に騎乗した被験者C

(35 ; 踏切り寸前, 36 ; 飛越, 37~38 ; 着地後の駢歩)

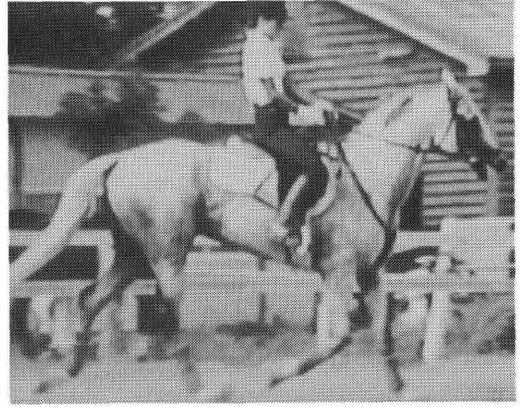
体にしがみつき踵が挙がり、手綱を引っ張りウマは嫌って大きく頭を挙げて口を割っている(写真42)。駢歩(写真43：伸長駢歩)では、骨盤がウマの後躯の踏み込みに浮かされ坐骨が鞍から浮き上がり、膝の位置が浮き、踵もあがり手で手綱をつかんで安定しようとしている。

Fig. 11は、被験者F(初級者)とチターン号である。動きの印象は、一貫して騎乗者が「腰掛乗り」で出っ尻であり、推進が出来ないので、ウマは後肢を大きく踏み込むことが不可能となる。騎乗者の脚は、力んで足根関節を屈曲させており、ウマの動きに随伴して柔軟に動

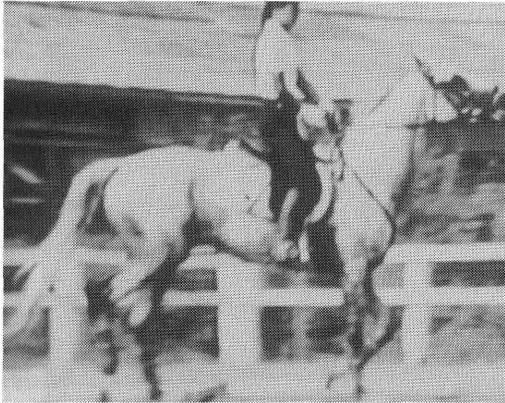
く事が無い。また、上体は不必要にグニャグニャ動く(特に正反動の速歩時)。あまり揺れない歩法である常歩(写真44：伸長常歩)時さえ、かなり脚が前方で骨盤は後方に遅れ、上腕はウマに引っ張られて体側から前方へ離れている。軽速歩でも、ウマの後躯の踏み込みの鞍への衝撃によってヒトの骨盤が浮かされ(写真45)、鎧に立った位相でも(写真46)遅れている骨盤を補うため手綱を引っ張り、ウマは引かれる銜を嫌って頭を挙げてしまい、鞍へ座る時は、後橋へドスンと落ち、外側へ開いた足尖と引っ張った手綱で安定を保っている(写真47)。



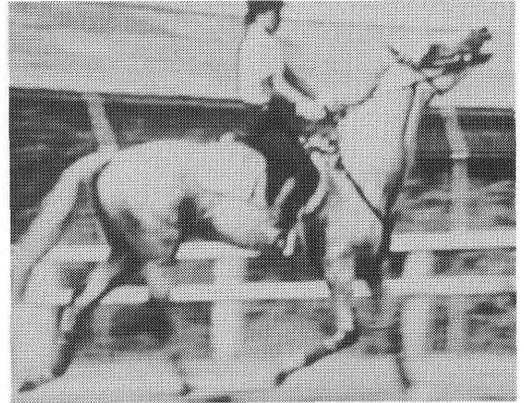
39



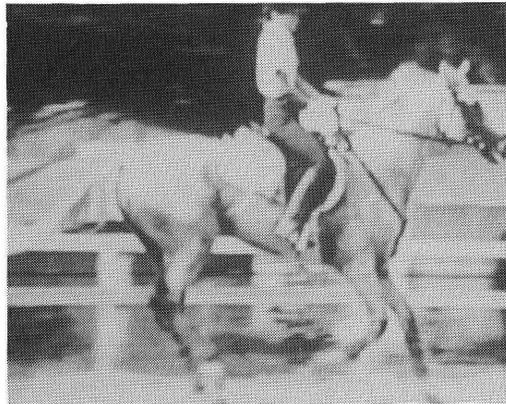
40



41



42



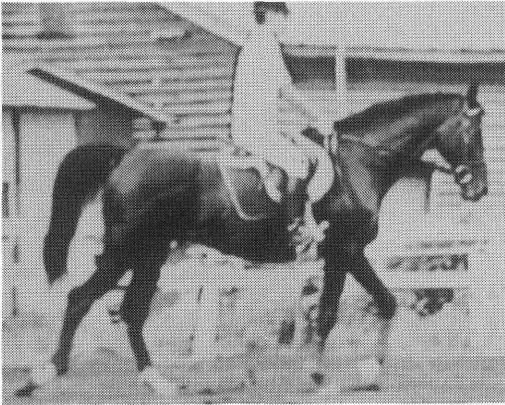
43

Fig. 10 Subject E on Weekend (39 ; collected walk, 40 ; collected trot, 41~42 ; rising trot, 43 ; extended canter)

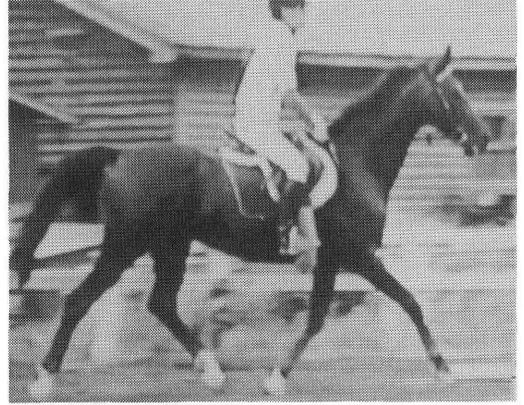
図 10 ウィークエンド号に騎乗した被験者 E

(39 ; 短縮常歩, 40 ; 短縮常歩, 41~42 ; 軽速歩, 43 ; 伸長駢歩)

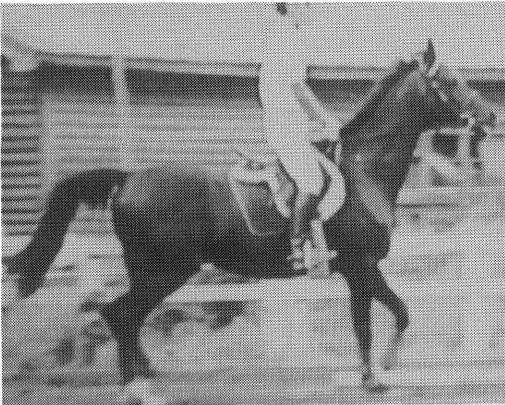
騎乗姿勢の観察から見た馬事文化の考察



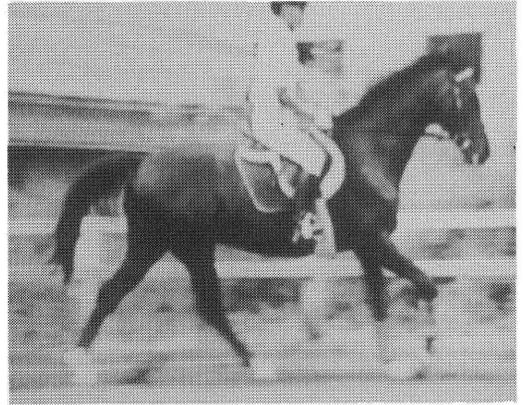
44



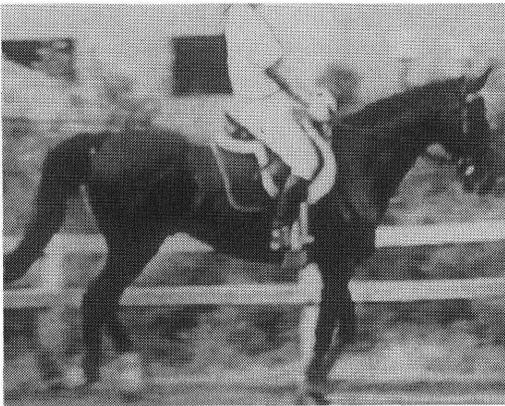
45



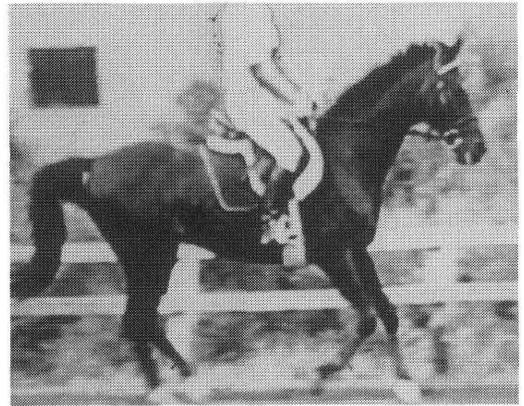
46



47



48



49

Fig. 11 Subject F on Chittern (44 ; extended walk, 45~47 ; rising trot, 48~49 ; extended canter)

図 11 チターン号に騎乗した被験者 F  
(44 ; 伸長常歩, 45 ; 軽速歩, 48~49 ; 伸長駢歩)

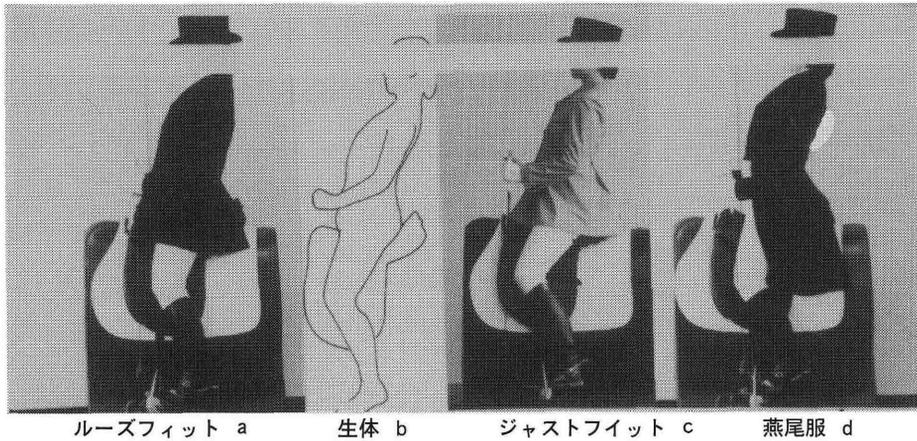


Fig. 12 The Comparison of the Halt Position Wearing Each Jacket or Coat (the lateral view)  
a ; loose fit, b ; contour of soma, c ; just fit, c ; tail coat

図 12 各上衣着用での減却姿勢の外観の相違

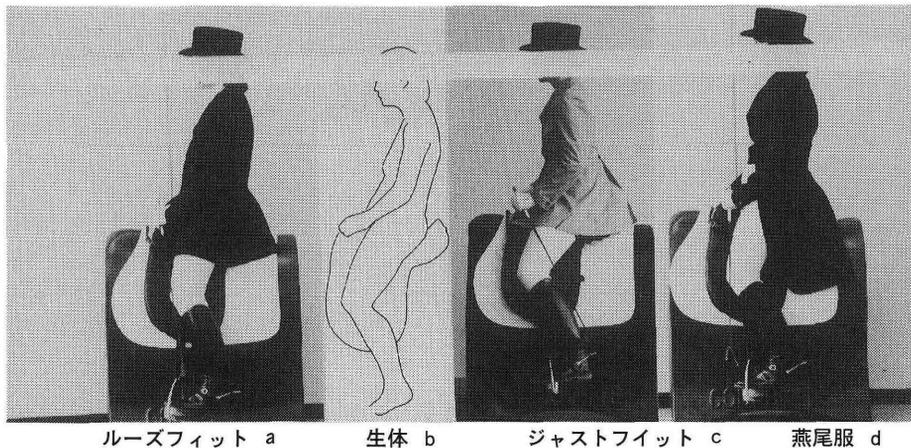


Fig. 13 The Comparison of the at ease Position Wearing Each Jacket or Coat (the lateral view)

a ; loose fit, b ; contour of soma, c ; just fit, c ; tail coat

図 13 各上衣着用での安楽姿勢の外観の相違 (側面)

伸長駢歩では、最も自然に骨盤がウマの背の動きによって前方へ運ばれる位相時でさえ(写真48)骨盤が遅れ、反り身姿勢がとれず、腕はウマに引っ張られ、空中期からの着地時では(写真49)、鞍の後橋に骨盤が落下するのでウマの後躯の踏み込みによって鞍から浮かされる。

Ⅲ-3 我が国の乗馬の現状および馬事文化  
Ⅲ-1 および2の様に、腰椎部の伸展が不十

分(場合によっては屈曲気味にさえなる)で骨盤がウマの動きに遅れる初心者の欠点は、ウマに対して推進が与えられず手綱(馬銜)でウマの口を引っ張りウマに苦痛を与える。そして、柔軟でない股関節、膝関節は、鎧を踏み下ろす事ができずに、脚ごと上方へ投げ出される。上級者の馬術的な正しい姿勢は、ウマの身体的および精神的性質に応じた操作を可能とし、人馬

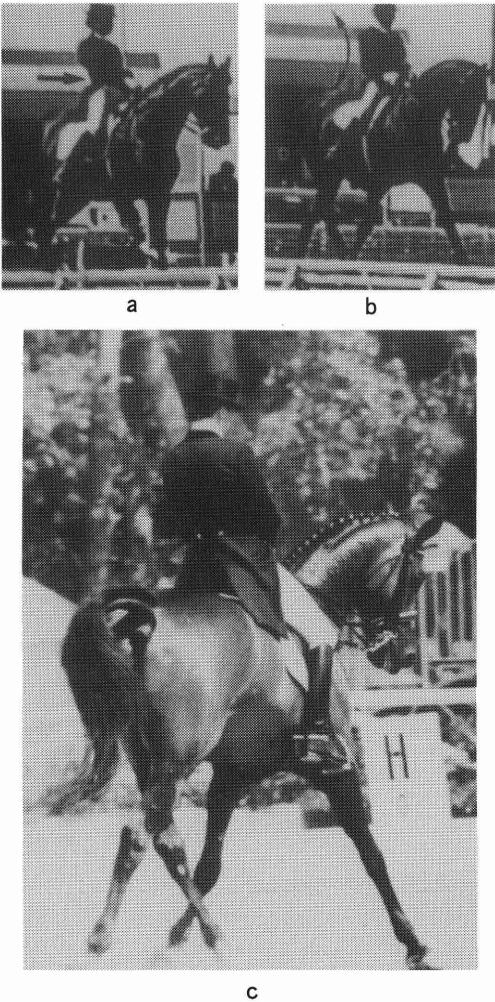


Fig. 14 Some Performances of Dressade Grand-Prix

図 14 馬場馬術グランプリ種目の競技場面

にとって良い効果を生むが、未熟な姿勢は人馬にとって悪循環へ陥らせてしまう。また、ウマの動きへの臨機応変の随伴の巧拙の差が観察された。上級者では、ウマの姿勢を馬術的に導く事が出来、上級馬術用コスチューム（馬場馬術における燕尾服など）を、ウマの姿勢や動きと一体となった演技の中で着こなす事が出来る姿勢を保持している。

Fig. 12 は馬術的な姿勢、Fig. 13 は非馬術的な姿勢を静止鞍馬モデル上でとったものである。

上級者は、ウマがどんなに働いても、Fig. 12 のような姿勢を保持しうるのに対し、初級者では、Fig. 13 のような姿勢となり、乗馬服を着こなす事は出来ない。初級者に対しては、Fig. 13 の a に示すような、ややルーズフィットの乗馬服を着用する方が、姿勢の崩れが無難に隠蔽される。人馬共に、上級の訓練がされてきて初めて、Fig. 14 に示すような人馬一体の美性が、乗馬服によってより一層美しく演出される事が可能になる。この時、騎乗者の腰椎は伸展され (a, b の矢印)、背面には品格美が表現される (c)<sup>10)</sup>。

ところで、ウマを媒体としたスポーツの特性は、ウマとヒトの釣り合いがとれている事が必要不可欠な点にある。騎乗者の体格との釣り合いや性格の相性はもちろん、初心者には初心者用の、上級者には上級者用のウマが必要である。今回の騎乗姿勢の観察で、初級者では、馬上できちんとした乗馬姿勢がとれず、それにつれてウマの姿勢も馬術的なものではなく、その結果ますます乗りにくくなる、という悪循環もおきた。このような状況では、馬術的感覚が掴めるようになるまでに、苦心惨憺しなければならぬ。これは騎乗者が未熟な事だけに原因があるのではない。初級者には、そのレベルでバランスがとりやすいウマが用意されるべきである。福田は<sup>9)</sup>、乗馬等の姿勢を、身体の一部あるいは一部に passive の運動が課せられるスポーツの習熟の肝心の核心は passive の運動乍ら全く active に運動する姿勢をとることに在り、人馬一体という精緻な乗馬を表現する言葉も、馬上での全くの passive な運動乍ら馬上で active な運動姿勢をとることを的確に端的に把握した批評である、と述べている。そしてまた、このような運動姿勢をとることが、運動効果を百パーセントに発揮させるのであるがこの大切な「コツ」の習得は元来なかなか困難であるとも言及している。であるから、騎乗者の訓練段階で少し努力をすることによって、馬術的な人馬一体のバランス感覚が掴めるような、訓練に調度良い、バランスと力と性格を持った馬で練

習することが大切なのである。

我国の特殊事情として、競走用サラブレッドが世界に類を見ない高い飼養比率を占め<sup>7)</sup>、レースを引退後、第二の活躍の場として乗馬になる場合が多い事が上げられる。乗馬クラブや大学馬術部の練習馬の多くが、「競馬の経験のある」サラブレッドである。サラブレッドは、比較的短い距離を速く走る事に適した馬種である。しかしそれと同時に、様々な品種改良の基礎的な品種である<sup>8)</sup>。サラブレッドであるというだけで、乗用馬に不向きであるとは言えず、馬術家の中には動きの軽快なこの品種を好む名手もある<sup>9)</sup>。問題なのは、速力を競うレース用に調教され、レース経験のあるウマが、乗用馬に変更する事である。求められる運動時のバランスが異なるため、ウマにとっては大変な負担であろう。かつて教え込まれた事を行なおうとすると、乗り手から叱責の鞭を被ることもなる。初心者の未熟な乗馬姿勢が、ウマに速力を要求する時のバランスに近いことから、騎乗者とウマとの意志の不疎通が生じてしまう。騎乗者には恐怖感を、ウマには混乱を与えてしまう。

商品としてのウマを考えても、我国では、競馬用のサラブレッド生産のみを目的として馬匹生産がされているといっても過言ではない。散策用、レジャー用、情操教育用、そして馬術競技用は、競馬あがりのサラブレッドを手直しするか、さもなければ高額な出費をして外国産の調教されたウマを購入することによって賄われている。出来上がった輸入馬はしかし、日本人ではトレーニングを持続する事がなかなか困難で、外国人トレーナーを招聘する事もしばしばである。

出来上がったウマを単に経済力で購入し得たとしても、それは「馬事文化」を身に付けた事にはならない。「学ぶ」段階では、確かに先進文化の産物を手に入れて、使ってみる事が第一歩であろう。しかし、自らの手で、育成し、創造して行くことが出来ない限り、経済力に任せた真似事からは脱却できないし、自信も生まれない<sup>10)</sup>。

自信が希薄な所からは、次代の育成など望むべきも無い。極端に言えば、初心者に、乗りこなせないウマを与えて、うまく乗れない事を叱りとばすような誠に滑稽な状況が繰り返され、そこからは向上も、幸福も生まれまいであろう。

我国の馬事文化全体は、残念乍らこのような状況に近い。その中であっても、Ⅲ-1,2で見たような、大学の馬術部は、出来る限り若者の「人馬のコミュニケーション」の夢を叶えるべく奮闘している。しかし、馬事先進国に比較すれば不遇な状態と言わざるを得ない。

このように、練習中の騎乗姿勢をひとつとってみても、根底となるべき「馬事文化」の底の浅さが垣間見られる。根本的な「人とウマとの関わり」が不在のまま、競技会で燕尾服やジャケットを着飾っても、外見だけの上への装飾に過ぎないであろう。人馬一体の美しさには、例えば「調和」、「輝き」、「品格」、「優美」、「重厚」、「躍動」、「スピード」、「生命感」を挙げることが出来、これまでの実際の乗馬場面や、それを題材にした造形表現にこれらを見ることが出来る<sup>11)</sup>。そしてその一部を担う乗馬服もまた、その時々の人馬の素質や訓練段階によって着こなしが異なる。さらに、一見未完成な人馬の姿勢であっても、その姿勢の調和が見事であれば、その着こなしは総合的にすぐれたものとして映える。例えば、バルセロナオリンピック馬場馬術競技で金メダルを獲得したニコル・ウブホフとレンブラント号の伸長速歩では、やや騎手の上体が前傾している、と云々されても、これは馬の動きを障害しないことを優先させた結果であり、総合観察の結果、競技成績の騎手の姿勢・騎座は10点満点の9点である<sup>12)</sup>。また、ソミュールのフランス国立馬術学校での教官の騎乗姿勢が、入門段階の馬と完成段階の馬に騎乗する際に多少異なっているのは、それぞれの馬の訓練段階に応じた結果であって、それぞれに美しい<sup>13)</sup>。

我国の国情を考えると、ステータスシンボルや競技のための馬術だけではなく、現代人の心の安らぎのパートナーとして馬が求められる趨

勢になってきたとはいえ<sup>10</sup>、批判はたやすいが実際の改善を行うことには様々な困難な面があることも事実である。それでも、日本人が、西欧文明への憧憬や経済力の証しとしての「ウマ」ではなく、生きていく上でのかけがえのないパートナーとしてウマを求めているのであれば正しい馬事文化へ向けての未来は明るい、と筆者は確信している。その時こそ、上べのカッコウ良さばかりではなく、乗馬服というものの有する、機能性と美性への深い洞察も可能になると考える。

#### IV 謝 辞

指導教員の文化女子大学 中尾喜保教授、日本ウマ科学会、被験者、乗馬、実験フィードを提供していただきました、麻布大学 馬術部員の皆様方に深く御礼申し上げます。

#### 引用文献

1. 大久保裕文編, ポニー城のわんぱくたち. 乗馬ライフ No. 40, オーシャンライフ (株), 東京, 1987年, p8~17.
2. 山口真知子, 英国 R. D. A. での障害者乗馬研究報告. Japanese Journal of Equine Sce., Vol. 4, No2, 1993年, p170~171.
3. 寺田佳代 他, 乗馬中の馬体と騎手の同調性. 日本体力医学大会要旨. 1996年9月18~20日, 於広島.
4. 日本馬術連盟 馬場馬術審査用紙の, 審査基準のうち総合観察には, どのレベルの競技でも「騎手の姿勢, 騎座, 扶助」の項目がある.
5. 寺田佳代 他, 馬術競技における障害飛越前の騎手動作が馬に与える影響. 日本体育学会要旨. 1996年11月21~23日, 於 千葉.
6. 福田 精, 姿勢と量い「人馬一体」の平衡生理, 脳と神経, 第3巻6号, 1951年, p322~217.
7. 澤崎 担, わが国ウマ科学の先駆者たち. Japanese Journal of Equine Sce., Vol. 4, No. 2, 1993年, p124~135.
8. Elwyn Hartley Edwards. The Ultimate Horse Book. Dorling Kindersley, Inc., New York, 1991年, p34~35.
9. 大久保裕文 編, フランスにおける今世紀最高の馬術家マルゴー中佐 (85歳), エルメスのスカーフを描く. 乗馬ライフ, No. 40, オーシャンライフ (株), 東京. 1987年, p30~34.
10. 大久保裕文 編, ドレッサージュ・五輪馬場馬術競技から学ぶ. 乗馬ライフ No. 72. オーシャンライフ (株), 東京, 1993年, p16には『美的感覚に優れ, 何事にも器用で, マネのうまい日本人が, 馬場馬術で世界に遅れをとっている事は理解できない……』とある.
11. 柴田眞美. 博士学位論文「乗馬服ならびに馬具のための形態学的人間因子の基礎的研究」. 文化女子大学, 1996年, p248~273.
12. 大久保裕文 編, ドレッサージュ・五輪馬場馬術競技から学ぶ. 乗馬ライフ No. 72. オーシャンライフ (株), 東京, 1993年, p11.
13. Philippe Karl 著 (千葉幹雄 訳, 日本馬術連盟監修), ロングレーン調教. 乗馬術を科学する会, (株) 啓文堂, 1995年, p21, 46, 77.
14. 徳川喜和子, 創立75周年記念東京乗馬倶楽部沿革. (社) 東京乗馬倶楽部, 1996年, p14.